完成されており、不完全の魔導書。

ゴールド@モーさん好き

【注意事項】
このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】
２ｎｄ　Ａ，ｓより１年後の無限書庫で起きた事件の話。
凍結

目次

1話 …… 1
2話 …… 7
3話 …… 13
4話 …… 18
5話 …… 22
6話 …… 27
7話 …… 35
8話 …… 40
9話 …… 45

1話

今はもう無き旧世界、《ベルカ》。そこには2人の”天災”がいた。その2人はある分野においてその才能を発揮し、多大なる恩恵をもたらした。

これはそんな2人の天災が残した魔導書から始まる物語である。

無限書庫、時空管理局が所有するデータベース。そこはありとあらゆる書物が収集・保管されている場所。収集される書物には時代も世界も関係なく、文字通り無限の書物が保管されている。まさに時空管理局が誇る最大のデータベースと言える…だが、このデータベースには大きな問題を抱えている。

それは人材不足である。というのも、無限書庫とは時空管理局が保有する”アナログ”データベース、つまりは図書館なのである。そしてこの図書館、内部は一種の亜空間で今明らかになってるスペースだけでも、本来の間取り以上のスペースが存在している。恐らくは今も書物と共に増え続けていると考えられている。

そんな途方も無い量のデータから欲しいデータだけを探すのは困難である。故に整

理しようと司書を配備して整理させようとしたが、収集されるものは古今東西を問わなすぎたのだ。整理作業中危険な魔導書を、司書の1人が暴走させてしまい死傷者多数…以降無限書庫では戦闘員との同伴が義務付けられたのだが、万年人材不足の管理局では情報収集に回せるほどの戦闘員が居らず、そのまま使われる事は無かった……つい最近までは。

ユーノ・スクライア。彼はある事件をきっかけに嘱託魔道士となり、その後無限書庫の司書になったのだが…その能力は素晴らしく、高いマルチタスク能力で1度にいくつもの書物を分析・組み分けをし、ある程度の物ならロストロギアを封印可能。彼単独での戦闘力もあり、まさに無限書庫の司書に相応しい人材なのだ。

そんな彼の奮闘により、数多の事件が解決されている。管理局を長年悩まされていた闇の書事件も1年前解決されている。これも彼の活躍あってこそだろう。

今ではその活躍により、少しずつではあるが待遇の改善・人材の補填がされて行ってる。だが、それでもまだまだ人材は足りていない。

未開拓領域にも彼単独で行く事も多々ある、そして今日も彼は1人で未開拓領域を探索していた。

金色の髪に翡翠の瞳を備えた少年が、強ばった表情で浮かんでいた。浮かんでいたと聞いて変だと思う人がいると思うが、決して彼が特異という訳ではなく、その空間自体が特異なのだ。

無限書庫、ここは膨大な書物とそれを収納する広大な内部の他にも通常世界とは異なる部分がある。それは無重力であること。何故無重力にしたのかは判明されてないが、今の所広大な内部の行き来を楽にする為という説が有力である。

そんな所で何故彼が強ばった表情をしているかと言うと、彼がこれから仕事に行くからだ。それも死の危険すらある仕事に。

彼、ユーノ・スクライアは無限書庫で司書を務めている。ここの司書の務めは大まかに分けて3つ。

1つめは書物の整理、2つ目は調査依頼が来た事柄に対する情報収集。そして3目が

「これより、無限書庫の未開拓領域の開拓作業を行う。」

そう言って彼は腕輪型のデバイスで録画を始めた。

ここ無限書庫はその名の通りそれこそ数えるのが呆れる程に書物がある。だけど、その反面未だにその全てを整理しきれて無いのだ。だが、整理するだけなら開拓とは言わない。開拓と言われるその訳として上げられるのは、ここは魔導書でさえ収集してしま

うからである。
　ただの魔導書なら直ぐに封印した後に管理局に保管されるのだが、罠や条件発動型の魔法が組み込まれている魔導書等がある。そういった事により1部がダンジョン化してる区域も珍しくないのだ。今回は運良く書庫としての形が保たれているが、それでも気は抜けない。
　ユーノは罠に注意しつつ魔力サーチ魔法を発動させて、魔導書が無いか探している。今回の主な任務は魔導書の発見、そして封印である。先程も言った通り危険な魔導書もだが、普通の魔導書も封印して持ち帰ることになっている。
　というのも以前危険性が低い魔導書を封印した後その区域に置いてった者がいて、整理する際にそれの解析をした所封印が解かれて暴走。結果、負傷者がでてしまった事がありそれ以降は危険性が低くても魔導書は一律として封印後特定の場所で保管する事になっている。
　そうこうしてるうちに1冊の魔導書がサーチに引っかかった。そして驚くべき事にその魔力がオーバーS相当なのだ。これは危険と思い、ユーノは管理局本部に連絡をした。
「……?!これは、危険すぎる。本部、聞こえますか本部……クソっここじゃ本部まで通信が繋がらないのか！」

（どうする？今すぐ本部に戻って結界魔道士呼びたい所だが、この魔導書の魔力の溜まり具合からしていつ暴発するかも分からない。なら…今ここで封印を！）

そう思いユーノが件の魔導書に近づいた。全く整理されてないのでそこら辺にほっぽり出されているその魔導書を視認した時、微かに違和感—いや既視感を感じた。その魔導書は全体的に赤茶色で、表紙中央には十字架が着いている。

（なんだ？この感じどこかで…いや、それよりも今は封印に専念しなきゃ。）

そう考え残り３ｍの所まで来たその瞬間—魔導書が急に開き、魔法陣を描きそこからワイヤーのようなバインドがユーノに迫る。

「?!ラウンドシールド！まずい、魔導書が覚醒し始めた…出来ることなら覚醒前に封印したかったけど仕方ない、マルチタスクは司書の本領だ……この魔法はゼロ距離じゃないと難しいけど、これ以上の封印魔法は生憎と持ち合わせてないからな。」

そう言った後ユーノはシールドを展開しつつ接近、手で印を数回紡ぎ詠唱を唱える。

「妙なる響き、光となれ、災いをもたらすものに、堅牢なる檻を！封印！」

ユーノの判断は正しいものであった。これまでも暴走した魔導書はシールドで防ぎつつ、近づいて封印。このプロセスで封印してきた為今回もこの戦法を使用した…が、今回は相手が悪かった。

「な?!」

封印の為にユーノは魔導書に触れたその時…体が光り、粒子のようになり始めたのである。
何が起こっているのか分からないがとにかく退避しようとしたが、何故か体が動かずそのままユーノは消えて粒子は魔導書に収集されて行く。
全ての粒子が収集し終えたら魔導書はページを閉じた。

2話

無限書庫はいつも慌ただしい、その理由としては闇の書事件の解決をきっかけに有用性が分かった事で依頼が増えたせいである。だが、今はそれとは別の意味で慌ただしくなっている。何故かと言うと――

「これより無限書庫未開拓領域開拓作業中に消息が途絶えた、スクライア司書の救助を行う！」

無限書庫の要であろう人物、ユーノ・スクライア司書が帰らぬ人になるかも知れないのだ。このような事になったのは今より数十分前――

無限書庫内ではその時もいつも道理、資料と奮闘する司書達がいた。普段と変わる事といえば今日は主力であるユーノがいない為か、全体的に少し遅れている事である。

そんな中オレンジ色の狼型使い魔――アルフも周りの司書達と共に資料とにらめっこ状態だ。

「ふう、やっと午前のノルマ終わった。ユーノそっちはっとあいつは今頃無限書庫の奥か。」

仕事がひと段落ついたので友人のユーノを昼飯に誘おうとした所で、当人は別の仕事を受けてる事を思い出しす。そしてもう1つ重要な事も思い出した。

（あれ？ユーノから定時連絡来てたっけ？…何だか嫌な予感がしてきたぞ。）

そう思いアルフが確認してみた所、最後の連絡が2時間前で途切れていたのだ。

無限書庫の未開拓領域は常に危険が伴うため、４０分に1度定時連絡をする事になっている…が、今日はユーノがいない事に加えいつもより依頼数が多く、そこまでに気が向けられなかった。

そこからは速かった。直ぐに司書の1人が本部及び救助隊に連絡し、救助隊が到着するまでにユーノが行った未開拓領域までのルートデータを纏め引き渡す

そして今に至る――

既に救助隊は出発して数分、アルフと数人の司書は昼休憩の為食堂に来ているのだが、どの顔も暗いものばかりであった。それも無理もないとアルフは考える、それもそのはずだろう。

ユーノは時にはその多量のマルチタスクによって無限書庫のストライカーに、時にはその気遣いによって司書達の心を支え癒す。時には、時には――

このように今じゃ無限書庫にとってユーノ・スクライアという存在は大きい存在になっていたのだ。

そう考えていると女司書がアルフに話しかけて来た。
「アルフさんユーノ君、ちゃんと帰ってきますかね…」
（まぁそういう事考えちゃうよね、だけど―）
「安心しな、確かにユーノはまだまだちんちくりんだけど腕は確かだ。恐らくジャミング系のトラップか、空気中の魔力濃度が高くて連絡が取れなかったんだと思う。その程度、あいつならくぐり抜ける。」
「そ、そうですよね。ユーノ君ちゃんと…戻ってきますよね。」
だけど未だに女司書は暗いままだ。

ユーノ・スクライア司書が救助されたと報告されたのはそれから、1時間後の話だ。

少女達は走っていた。大切な人が”そこ”に運ばれたのはなにも初ではなかった、だからまた無茶をしたのだろうと軽く考えたのだが、運ばれた理由を聞いて頭が空っぽになった。
気がついたら少女は”そこ”に向かって走っていた、悲鳴をあげる足を無視して必死

に”そこ”に向かっていた。
「ユーノ君!」
少女―はやてはユーノ・スクライアの病室のドアを開け、そう叫んだ。
病室を開けたその先にはベッドに横たわっているユーノと彼女の家族であるシャマルがいた。
「はやてちゃん、病室では静かにですよ。それになのはちゃんやフェイトちゃんも走ったらいけませんよ?」
「あっゴメンなシャマル…じゃない!ユーノ君は…ユーノ君は大丈夫なん?!いったい何があったんや?!」
「詳しい事はちゃんと言うから、まずは座って。」
はやて達はシャマルに促されるように、椅子に座る事にした。
「じゃああらためて…ユーノ君に一体何があったんですか、シャマル先生。」
なのはの質問に、シャマルは顔に影を差す。
「…正直に言うとなんとも言えないの。」
「ど、どういう事ですか?」
シャマルの言葉は、3人には意味がわからなかった。夜天の書の守護騎士、それも後方支援で群を抜いて得意なシャマルが分からない?

「ユーノ君、ある部分を除いたら小さい切り傷や擦り傷と言ったものばかりですぐに治ったの。だけど…」
「だけど、なんですか？」
「…リンカーコアが変質していたの。」
「……へ？」
「だからリンカーコアが変質していたのよ。そもそもとしてリンカーコアは身体機能の1つで、人それぞれに形というか波長のようなものがあるの。だからユーノ君にはユーノ君だけの波長があるのだけど、現在のユーノ君のリンカーコアは以前とは全くもって別物になっているの。異例が無いからこれがどのような事態を招くか分からないけど、決していい事ではないと考えてるわ。」
「そ、それじゃあもしかしてユーノはこのまま……」
「…うん、起きない可能性もあるの。一応無限書庫に関連文献がないか調査依頼を出したのだけれど、今の所はまだ…」
「そう、なんや…」
　その話を聞いて少女達は黙りこくってしまったが、その沈黙を破いた者がいた。それは……

「んっ……うぅ、ここは？」

今まさに起きる事はないかもと言われていた、ユーノ・スクライア本人であった。

3話

1番早く声をかけれたのはシャマルだった。職業柄自身の驚きよりも患者を優先する事が多い為であろう。
「ユーノ君?!気がついたんですね、気分はどうですか?」
「シャマル、先生?という事はここは…医務室?」
ユーノは意識が戻ってきて、現状把握に頭をまわそうとした所に…
「ゆぅぅのくぅぅぅん!!」
「え?!なのは?!」
「よかった、よかったよぉぉ!」
「え、え?なに、どうゆう事?!とにかくなのは落ち着いて…」
「ゆーのグゥん!」
「はやても?!」
なのはとはやてが急に泣き始めた事により困惑しながらも宥めるユーノと、涙目ながらもユーノと一緒に宥めるフェイト。そして彼女らの心境をなんとなく察しながらもそうなった原因には言わずに2人を宥めるシャマル。

ユーノは2人を宥める最中現状把握を済ませていた。

「「お恥ずかしい所を見せました…」」

「いやまぁ私もユーノが目覚めないかもって聞いた直後だったから気持ちは分かるよ…」

「え”?!そんな話になってたの僕?!」

「そうよ、ユーノ君。貴方、物凄く危険な状態だったのよ分かってる?」

「え、えっと…アハハハ」

その後シャマルはユーノ君に自身のの体に何が起きているかを話した後、探索中何があったかを聞いた。

「ユーノ君、無限書庫の奥部で一体何があったの?君程の実力なら大抵の事は大丈夫だと思うんだけど。」

「君程の実力って、買いかぶり過ぎですよ。」

「ユーノ君はいっつもそうやって…まぁ、この事はまた今度話すとして本当に何があったの?」

「その前に確認ですけど、僕が倒れてた周りに覚醒済みの魔導書の類は無かったんですよね。」

「そうね、そういう報告は無かったわ。もしあったら倒れた原因の1つとして考えられるから報告があると思うけど無いって事はそういう事なんだと思うよ。」
「そうですか…じゃあやっぱり…」
「やっぱり?」
「いえ、そうですね…簡潔に述べるとしくじっちゃったんですよ。」
「しくじった?あの慎重さが服を着てるようなユーノ君が?」
「なのはそれは酷くないか?っと話を戻すよ。探索中に巨大な魔力反応を示す魔導書があって、僕が近ずいたせいなのか分からないけどそれが覚醒しちゃってね。本部の方にも空気中の魔力が高かったせいで連絡も出来ずにそのまま僕一人で封印しようとしたんだよ。そしたら…」
「そしたら?」
「本に吸収されちゃったんだ。」

「「えええ?!」」
「いやだからァ本に」
「違う、そういう事じゃないよユーノ。私達は何も聞き漏らしてないよ。」
「えっじゃあどうゆう事?」

「どうゆう事はこっちのセリフなの！」
「本に吸収ってどういう状況や！」
「そう言われても僕にはそうとしか言えないし…」
「ハイハイみんな落ち着いて、このままだと進まないから。それでユーノ君本当に吸収ってどうゆう事？詳しく教えて。」
「分かりました、と言ってももうそのまんまと言いますか…さっきも言った通り魔導書の放出魔力が高くて、僕が使える封印魔法で1番効果があるものを使おうとしました。それは効果が強い分ゼロ距離で発動しないといけなく、本に触れて発動しようとしたら…」
「吸収されてしまった。」
「その通りだよ、フェイト。直ぐに離れようとしたけど体は動かなくて、体もだんだんと光となって消えて行ってしまったんだ。完全に消える前にその光が本に吸収されるのを見たから事の顛末はこれで合ってると思う。」
「うーんなんとも奇天烈やな、そもそも本当に吸収されてしまったんならなんでその後吐き出したんやろ？」
「吐き出したって…いやまぁ吸収されたお陰でその魔導書の目的は分かったけどさ」
「へぇーなんやったんやユーノ君。」

「うん、それは……」

この時私達はユーノ君の余りにもいつも通りな態度に失念していた。

彼が先程まで起きるかも分からないような状態だったのを。

そして知らなかった、リンカーコアの変質の本当の意味を。

その後ユーノ君の口から発さられたのは言葉ではなく

「ゴパァッ！」

大量の真っ赤な血だった。

4話

ユーノの口元からポタポタと血液が流れ、ベッドのシーツを赤く染める。
「ユーノ君！今すぐ回復魔法かけますから！」
「ゴホ、強制発動は聞いてなかったんだけどな…仕方ない。」
「何が仕方ないか分かりませんがとにかくじっとしていてください！」
そう言うやいなやシャマルはナースコールを押した後回復魔法をユーノにかける。
「ゴホ…シャマル、先生…回復魔法よりも〝結界魔法〟を…」
「こんな時に何言ってるんですか！そんな量の血を吐いておきながら！」
「そ、そうだよユーノ君！何でこんな時に結界魔法なんか」
「本来なら、ハァ…ちゃんと準備したかったけど…それダメっぽくて、だから」
「だから何を言うたいんやユーノ君?!私には意味がわからんのや。」
「実は、さっき言った本に少し細工…施されてて。リンカーコアの変質も、グッそのせいなんだよ。」
息を荒らげながらユーノはそうみんなに伝える。
「あの魔導書は使用者を魔導書に適用…ハァ…させる為に改造を、施すんだ。その時に

魔力の余波があるから…だから回復よりも結界を優先してください。改造事態は危険はさほどありませんので。」
「分かったわ、みんな後は私に任して。クラールヴィント！」
《了解》
シャマルはなのは・フェイト・はやてを残して結界を展開する。

結界が展開された事を確認するとユーノは更に血反吐はいた。
「ユーノ君！やっぱり危険無いなんて嘘じゃないですか！とにかく治療を…」
「いえ、そんな事よりもシャマル先生」
「そんなことって貴方自分の体が大事じゃないの！」
「体は本当に大丈夫なんです。ただお願いがあるんです。」
「お願い？こんな時に何を…」
「簡単な事です、ただ……してくれればいいんです。」

ユーノ君がシャマルの結界の中に入った後にナースコールによって呼ばれたお医者さん達が来た。それをシャマルに連絡すると何かを堪えるような声で返事しながらその人たちを結界内部に転送した。
その後３０分ぐらいした後にユーノ君とシャマル、さっきのお医者さん達が結界から出てきた……私の騎士達に良く似た人と共に。

ただいまクロノは尋問室に居た、それは不審者に尋問する為なのだが相手が問題なのだ。というのもその相手は――
「まず、君の名前を教えてくれるか。」
「私は〝陽天の書〟の融合機。名前など無い。」
あの雪の日に消えたリインフォースに酷似しているからだ。
「そうか、では君を今は融合機として呼ばしてもらう。」
「構わない。」
（知人によく似た人物を尋問……嫌になるな。これがあと４回もか。）

クロノはそんな自分の感情を押し殺して尋問を始めた。

5話

「それではまず初めに君の言っている陽天の書という物はなんだ？」
「そうだな、言葉にすれば簡単な事だ。夜天の魔導書原本を複製、改変したものだ。」
「なぁ…？！」
　クロノは融合機の容姿と名前のニュアンスから夜天の魔導書が関連するだろう事は予想していた。予想していたが、まさかそれの改変されているとしても原本の複製とは思わなかった。……改変？
「……か、改変とはどういう事だ？」
「そう恐れるな、主の友よ。我らは〝闇の書〟のように貴様らを陥れるような事はせぬ、むしろその逆だ。」
「逆？僕らに味方すると？夜天の魔導書の複製品である貴方が何故？」
「そもそもとして私…いや、〝陽天の書は闇の書の開発者がカウンターとして作成した魔導書〟だからだ。」
　僕は目の前の人物が一瞬何を言っているのか分からなかった。そしてその言葉を理解した瞬間怒りがこみ上げて来た。

「闇の書の開発者が君達をカウンターとして作った？ふざけるな！何故そんな事をする必要がある！だったら作らなければ良かったじゃないか！」
「マイスター達だってしたくは無かったさ！あんな悪魔のような魔導書！」
今まで無表情を通してきた彼女の怒声にいくらか冷静さを取り戻した。
「?!……作りたくなかった？それは一体どうゆう事だ？あれは悪意ある改変を受けてあなったと聞いているが。」
「そう聞いてるとは知っている。だが、事実は違うのだ…」
（知っている？）
クロノはその言葉に少し疑問が生まれたが続く融合機の言葉に集中する為その思考は切り捨てた。
「マイスター達はベルカのある国の研究者だった、当時その国では隣国との戦争で新武器、及び新魔法の開発に駆り出されていたのだ。私のマイスター達はその中のうちの２人…どちらも天災と呼ばれる程の発想力とそれを実行できる実力があった。だがそんな２人はそんな才能とは打って変わって心優しきお方だった…本来彼らは魔力を素に生活を豊かにする研究をしていた。それを軍事活用できないかと国側が目をつけられたんだ。」
「断らなかったのか？」

「最初は断ったさ…だが、国は諦めなかったんだ。マイスター達には当然家族が居た。愛する妻に子供、親だってまだ生きていた。」
「まさか……」
「執務官殿は察しが付いたようだな、人質にされたのだよ〝妻と子供達〟を……両親を見せしめの為に目の前で殺した後に。」
「な?!」
　そのセリフにクロノは今日何度目かも分からない驚きに包まれた。それもそうだろう、人質に大切な人が囚われるのはよく聞く話だがそれで充分だろうに更に大切な人が殺される。それ程までする理由がクロノには理解できなかった。
「2人は仕方なく国に従い開発に勤しんださ、これ以上大切な人を亡くさない為に。それから数年した時だ、夜天の魔導書にマイスター達が出会ったのは。夜天の魔導書が国にバレれば必ず軍事目的に利用される。そう悟ったマイスター達は隠していたのだが、ある時不審に思われて自白魔法で強制的にはかされ……」
「そして見つかってしまい軍事利用の為に改造せよと命令、大切な人が人質となっているから逆らえもせず完成を迫られる。これが――」
「そうだ、闇の書が作られた経緯だ。」
　クロノはこれを聞き頭痛を感じた…それもそうだろう、なんせ自身の恨みの矛先がお

門違いにも程があったのだから。幼少期は闇の書に、事件を担当していた時は夜天の魔導書を闇の書にした者に…だが、これを聞く限り真に憎むべき相手は彼女のマイスターではなく、既に滅んだ国だったようだ。

そんなクロノの様子を察したのか融合機は言を続ける。

「君は間違っていないさ」

「何？」

「大方君はマイスター達を恨んでいたのだろう？そしてそれが勘違いであった事に気付き自分を責めているのだろうが……マイスター達はそれを望んでいる。」

「何故だ？君のマイスター達は大切な人を失い、囚われながら闇の書を作った。それ程の理由があって仕方無く作ったのだから恨まれるなんて流石に――」

「それでも、マイスター達は数多くの兵器を開発していた。そしてそれがもたらす結果が分からないほど愚かではなかった。だからこそマイスター達は心に決めていたのだ――せめて、自身の兵器で誰かが大切な人を失くした時は…その恨み憎しみを受け止めると、それが自分達が出来る数少ない贖罪であると。」

「……そうか。」

数刻沈黙した所でクロノは尋問を再開した。

「それでは改めて君の目的を教えてくれるか？」

「目的？」
「そうだ、先程の口ぶりからユーノからある程度の事は聞いているのだろう。それなら何故奴と契約する必要があった？」
　その質問に融合機は納得したかのような顔をして質問に答えた。
「確かに夜天の魔導書の闇は取り払われ、我ら陽天の書が作られた意味は無くなった。だがそれはカウンターとして作られた我らの意味が無くなっただけであり、今は他に目的が出来たのだ。」
「他の目的？それは一体なんの事だ。事と次第によっては我々管理局も動かざる得ないのだが。」
「何、そんな物騒な事では無い。寧ろ貴方方にとっては嬉しい事であるはずだ、先程も言ったであろう？我らは味方であると。」
「そこまで言うのであるのなら結論を述べて頂きたい。そうしなければ味方として君を迎いいれない。」
「簡単な事だ、我らは主と共に〝無限書庫私設武装組織〟を結成するだけだ。」
「……は？」
　クロノは融合機の唐突過ぎる言葉に、言葉を返せなかった。

6話

「無限書庫の、私設武装組織だと？」
「あぁ、人材は我ら陽天の守護騎士でまかなうのでそちらに迷惑はかけない。」
「い、いやそういうことではない！確かにその問題もあるが、その前になぜ必要なのだ。あそこはデータベースであって戦場では――」
「無いとでも言うつもりか？笑わせるなよ〝執務官〟、あそこは紛れもなく戦場だ。それも激戦区だぞ？何もかも知らないという訳では無いだろ。」
「――！」
　彼女の冷たく、鋭い瞳に僕は思わず気圧されてしまった。だが、そのままでは前に進まないから口を動かす。
「た、確かに開拓作業中に危険な魔導書と遭遇する事もある。だがそれなら開拓作業の際に、何処かの武装隊に護衛申請を送れば済むはずでは？そもそもそういう規定だった筈だ。」
「そうだな、確かに管理局の規定ではそうなっているな。」
「それが分かっているのなら何故――」

「3回。」
「…は？」
「だから3回と言ったのだ。この1年間で通った、武装隊への護衛申請の回数。」
「1年間で…だと？それはおかしい、何故なら奴は一月に2回のペースで開拓作業を行っていたはずだ。」
「そうだそのペースで我が主は無限書庫の開拓を行った。」
「だったら奴は申請が通らなかった時はどうしていたって言うのだ！まさか1人でやっていた訳ではあるまい。」
「いいや、1人でやっていたぞ。開拓から封印、事後報告の為のレポート。何から何まで。」
　その言葉にクロノは言葉を無くしてしまった。
「開拓作業はある意味執務官殿より死が近い、何故だか分かるか？貴様らは次元犯罪者を追っている、脅威の対象が〝分かっている〟。対して無限書庫の開拓作業員はどうだ？進行先の書庫の広さ、書物の量、無害か有害かの判別。〝全てが分からない〟！〝全てが未知〟！そんな場所に赴くというのにこちらの戦力は主のみ……ハッキリ言うが管理局は人1人が死のうがどうでもいいと考えているのか？」
「ち、違う！そんなの考えて等――」

「確かに貴様は考えていないのだろうな、だが組織とは多い方の考えがそのまま組織の考えとなる。今までの対応は主に死ねと言っているのに等しいものだぞ？なんせ手が空いているであろう武装隊が居る時でも申請は中々通らない、手が離せない？タイミングが悪い？それであんなにも拒否されるのなら主の運は管理世界随一で悪いのであろうな。これで分かったろ？私が武装組織を設立させようとした経緯は。」

僕は訳が分からなくなっていた。この短い尋問で色々と知って、まだそれが整理出来ていなかったからだ。背中には気持ち悪い汗が、胸の辺りでは何か気持ち悪い物が込み上げてきそうだった。

そして僕はいつの間にか他の局員と尋問を交代していた、恐らくは誰かが僕の様子を見兼ねて指示したのだろう。

彼女は僕が退出する際に何か僕に伝えていた気がする。それは確か――

「主について知りたい事があれば湖の騎士に聞くといい、少なくとも君が知らない事を知っているはずだ。」

◊？

管理局のある一室、そこには人が集まっていた。集まっていた理由は別室で行われている尋問を見ていたからである。

「クロノ執務官、貴方にはただ今より緊急の用事があります。バラム執務官に尋問を引き続ぎした後、指定の部屋に来てください。」
『了解しました、艦長。』
　そんな中尋問の途中で様子がおかしくなったクロノを見て、リンディはクロノを下げた。どの道あのままだったら尋問も上手く行かないと思われるから良かっただろう。そして少ししたらクロノはその部屋に入ってきた。
「お疲れ様クロノ。」
「すいません艦長、尋問の途中で取り乱してしまい…」
「いいのよ、あれくらいの事を言われたら私も動揺すると思うわ。それよりもこれで役者は揃ったわね、話を聞かせて貰ってもよろしいかしら――シャマル先生？」
　そう今も沈黙を貫いているシャマルに向かって言葉を放つ。
◇？
（とうとうこの事を皆に言う時が来ちゃいましたか…本人は未だ〝適合〟の時のダメージで眠っていますが…仕方ありませんね。）
「分かりました、先程融合機さんからも許しが貰えましたのでお話致します。ユーノ君が何故あそこまで〝がむしゃら迄に〟無限書庫で働いていたのか。ですが少々ショッキングな内容もありますのでお覚悟を――」

そう前置きをし、湖の騎士シャマルは彼について話し始めた。
「まず初めに言っておきますと、昨日までは〝彼が大人になる事〟はまず不可能だった事ですかね。」
「な?!」
「嘘でしょ?!」
この言葉の真意を直ぐに汲み取れたのは、年長者であるシグナム、そしてリンディであった。そしてほかの面々もその言葉に気づき始める……ある者を除けば。
「シャマルさん、それはどういう事ですか?それではあたかもユーノ君が早死する様に聞き取れるのですが。」
「聞き取れるも何もその通りです、リンディ艦長。彼、ユーノ・スクライアは昨日までの診察結果で大人になる事は不可能…いや、いつ死んでもおかしく無かったのですから。」
「原因は一体なんだ?お前程の医者が治せない事柄だ、余程の事なのであろう?」
「そうね。皆さん、魔導書で物を出し入れさせれるのはご存知ですよね。」
「も、勿論や。転移系か、それとも魔力変換系かはさておきそういう事をできる事は知ってるで。シャマル達やってその1種やないか。」
「正解ですはやてちゃん。それでは他にも質問です…〟もしもロストロギアが魔導書に収納されてる事を知らずに近づいた場合〟、どうなると思いますか?」

その言葉に、彼が何故死に瀕しているかを皆が察してしまった。
「それは…」
「その魔導書の中に収納されていたロストロギアの名前は…〝時の杭〟。」
「時の杭だって?!」
「知ってるの、クロノ君。」
「あぁ、それは僕が以前ユーノに調査依頼をした代物だ。」
「じゃあユーノ君がこうなったのは!」
「待ってなのはちゃん、ねぇクロノ君。それを依頼したのはいつ頃?」
「…先月です。」
「そう、それなら大丈夫よ。時の杭は打ち込まれたのは半年前、君が悔やむべき事では無いわよ。」
「ですが!それだとしてもユーノに残された時間は余りにも短い!そもそも今生きてること自体が奇跡に等しくなる!」
「それはどういう事なのクロノ。」
「フェイト、それにアースラにいなかった皆は知らないと思うが時の杭と言うロストロギアには2つの効果が有るんだ。1つは対象者の心臓に寄生し、その機能を少しずつ蝕み死にいた占める事。そして――」

「そして魔力使用に伴いその効果は強まる、ですよねクロノ君。」
「…はい、その通りです。」
「待って、その話が本当だったらユーノは…」
「死ぬのを覚悟してあの過酷な職場にい続けたって事になりますね。」
その結果に誰もが頭を悩ました、それもそうだろう。誰がすき好んで自分の命を削るような真似をする。もし居るとすれば余程の馬鹿か余程――
「狂ってる。」
そんな言葉をヴィータが零した。
「ヴィータ…」
「だってよシグナム、コレが本当ならあいつはなんでここに居るんだよ！自分の命が惜しくなかったのかよ！」
「そうだよ。」
ここでずっと静寂を保っていた狼の使い魔――アルフが口を開いた。
「アルフ？」
◊？
「どういう事だよ…」
まぁそれが普通の反応だよな、あたしだってそうだったし。

「その通りだ、あいつは…ユーノ・スクライアって人間は自分の命なんか捨て駒程度にしか考えていないのさ。」
「ふざけるな！あいつ程優しい奴が命の大切さを知らないわけが無いだろ！」
「あぁ、知っているよ。命の大切さを、だけどそれは〝自分以外の命〟であって、自身は含まれていないんだよ。」
「どういう事、アルフ。」
「そのまんまさフェイト、あいつは誰にも〝大切にされた事が無く〟育てられたからさ。」
　悪いねユーノ、流石にここまで来たら全部話すよ。だから後でちゃんと謝るよ。

7話

「大切にされた事がない？」
「おい、なんだよその言い方。まるであたし達があいつの事を大切にしてないような言い草。」
「あーうん、これはアタシの言い方が悪かったな。言い方を変える、あいつは家族を知らずに育ったんだ。」
「アルフ、掻い摘み過ぎてよく分からないからもう少し詳しく教えてくれる。」
「うーん、でもまぁお母さんの言う通りだからもう少し詳しく言うか。実はさ、時の杭や今回みたいな事は結構起きているんだ。それこそユーノが闇の書事件の後、本格的に無限書庫で働くようになって初めての開拓作業を終わった後なんか司書の皆が度肝を抜かれたよ。」
「何があったんだ。」
　何か悪い事は確かだ、だがクロノは聞かずに居られなかった。今彼の中にあるのは友人の異変に気づかなかった自分への不甲斐なさ、そしてそれならば全てを知らなければという義務感だった。

「ユーノ本人が言うには攻撃的なトラップがあったらしくてね、〝腹に槍がぶっ刺さっていた〟よ。」
「……は？」
「あいつ自身も治癒魔法は使えるけどそれを使うには槍を抜かければいけないから、使ったのは痛みを感じにくさせる暗示魔法だけ。後は血流を抑える為に紐で――」
「ま、待ってくれ！腹に槍がぶっ刺さった？そんなの僕は何一つ聞かされてないぞ！」
「そりゃそうだ、あいつがそれをしないでくれと態々頼んだんだからな。」
「なん…で、そんな事。」
「そんなの、クロノも分かっているんじゃないか？心配を掛けたくない…否、彼奴からしたら切り捨てられるのが怖かったっていう可能性もあるな。」
　その言葉に流石のクロノも怒りを示した。
「何故僕がユーノを切り捨てるなんて事になる！あいつは僕の友達だぞ！」
「確かにそうだ、これは単なる私の憶測でしたかない。」
「なら何故そんな事を！」
「――見たんだよ。」
「？見た？一体何を見たんだ。」

「あいつの過去を。」

◊?

「ユーノの…過去?」
「そうだ、もっと正確に言えばあいつがまだスクライアに〝世話〟になっていた頃の記憶だ。皆知らないだろ?あいつが〝どのように育った〟か。」
　その言葉はここに居る誰もが同意し、そして気づいてしまった。自分が彼の事について知らなすぎる事に。
「それ、は――」
「まぁあいつ自身が積極的にそういうのを話そうとしないし、聞こうとしてもまぁはぐらかしてたからしょうが無いけどさ。っとまた脱線しちゃった、要は怪我するあいつがほっとけ無くて護衛で着いてくようにしたんだよ。それでさ、何回かこなした後私も余裕と言うか油断が出来ちまったんだよ。お陰様で私とユーノは魔導書にある魔法をかけられちまったのさ。」
「な?!アルフ!大丈夫だったの?!」
「あぁフェイト、体は大丈夫さ。ただ、あれ程迄に無力だと感じさせられたのは珍しいか

もね。」
「どういう事？その時何があったの？」
「受けた魔法はなんて事ない…ただ対象の幼少時の記憶を他者に見せる。たったそれだけだよ。」
「……それだけ？なんでそんなので」
「それ程迄にユーノの過去が、沈痛なものであったと。そういう事なんだな？」
「流石クロノ、話が速くて助かるよ。そうさ私はそこであいつの過去知った…知ってしまったんだよ。いやほんとに、何かをあんなにも呪った事は無いかもね。」
　アルフは苛立って来たのか目付きが鋭く、口調も強くなっていき、手で頭をガシガシとかき始めた。
「あ、アルフ？」
「本当に胸糞が悪かったよ、あんな事を子供にするのかって…如何してそこまでやれるのかって！そして何よりもあんなユーノに今まで気づけなかった自分にムカついたよ！」
　彼女の荒れようはハッキリ言って凄まじいものだ、確かに彼女の性格は少し荒っぽい所もあるが何でもかんでも荒れ散らかす様なものでも無い。つまり、ここまで荒れる〝ナニカ〟がユーノの過去にあった事になる。

「アルフさん、教えてください。一体ユーノ君に何があったんですか？」
「あぁ教えるよ、ただ約束してくれるかい？」
「約束？一体どんな事？」
「簡単だよ。〝何もしない〟、たったそれだけさ。」
「分かった約束するわアルフ、皆もそれでいいよね？」
「あぁ。」
「はい、大丈夫です。」
「そうかい、良かったよ。じゃあ良く聞いていてくれ、ユーノはスクライアにいた頃――」

今思えばこの日は本当に思い知らされる1日だったと思う。

「虐待を受けていたんだ。」
私達は彼の事を何も分かっていなかったのだと。

8話

「虐待?」
「あぁ、それも多種多様にな。直接的だったり間接的だったり、胸糞悪いのこの上ないよ。」
「でも、なんでそんな事に……」
「気味が悪かったんだろうね、ユーノの存在が。」
「それが分からない、少なくともスクライアは問題があるような奴だとは思えない。」
「問題なんて元々無いさ、なんせ彼奴は〝優秀〟だったんだからね。後は運が悪かった……としか言えないんだよ。」
「運が悪かった?どういう事だ。」
「何、別段珍しい話じゃないさ。ユーノは元々孤児だったんだ、そこをスクライアの一族に当時4歳だったユーノが拾われた。ただその時任せらた親がクズだった…それだけさ。」
「では何故先程のような考え方になる、何故僕がユーノを捨てるような考えが浮かんでくる。」

「皆ってさ、ユーノの事どう思ってるかは詳しくは分からないけど……少なくとも〝幼稚〟とは思ってないだろ？」
「それはとう…ぜん――まさか?!いや、そうだとしたら私達は――」
「母さんは気づいたようだね。」
「リンディさん、何か分かったのなら教えてください！」
「フェイトさん、貴方から見てユーノさんはどう言った人間だった？」
「えっユーノ？そうだね…〝優しくて〟、だけど〝1度決めたら曲げない〟。それと〝頭も良く〟て、とにかく〝凄い〟って感じ。」
「その優秀さが異常だった、そういう事――なのよね、アルフ？」
「そうだよ、皆はどう思う？齢6歳の子供が既に現場に立ち、9歳には現場のリーダーすら任される。私はどうかしてると思うね、場所によっては死者を出すかもしれない現場指揮をそんな子供に任せるなんてね。」
「それは……」
「だからこそ気味悪がった、そんな子供を。そんな異質なナニカを。」
「そんな事って――」
「そして何より、ユーノは幼すぎて尚且つ優しすぎた。災いの理由を他に押し付ける程の考えを持てなかったんだ。だからこそ彼奴は自分に理由を押し付けた、〝虐待を受

けるのは自分がいたらなかったから〝だと。」
「ふざけんな！話を聞いた限りユーノには何も非なんて無いじゃんか！」
「ヴィータ……」
「それなのになんで彼奴が、彼奴が苦しまなきゃいけないんだよ！」
「だから言ったろ、運が悪かった。育て親が違えばあーも歪まなかったよ。」
　その言葉は何か、諦めの言葉に感じた。
「それなら何故ユーノさんはその事を誰にも話さなかったのですか？ここは管理局…通報されれば何時だって――」
「それでも、親だからだよ。」
「――え？」
「どれ程暴行を受けようが、どれ程の罵声を受けようがソレが親だった。だからこそそんな事はしたくなかったんだろ。」
　その時私達は彼の優しさではない歪んだナニカを垣間見た気がした。
「ユーノにとってそんな日々が日常だった、だからこそお前達みたいに友と言える奴は初めてだったんだよ。だけど彼奴自身の自己評価が低く、今までのこともあったせいで〝釣り合わなかったら捨てられる〟みたいな歪んだ考えが産まれても可笑しくない。これで私が〝彼奴が自分の命を大切にしないか〟、〝もしかしたらユーノは捨てられる

のが嫌だったのではないか〟って考えたか分かったか？」
「――あぁ、ありがとう。」
「そっか、なら良かった。後先に言っとくが虐待についてはもうされる心配は無いから安心しとけ。」
「どういう事アルフさん？なんでそんな事が分かるの？」
「だって、彼奴はもう〝スクライア〟じゃないんだよ。」
「スクライアじゃない？でもユーノの故郷っていうか一族は――」
「あぁ、スクライアだったよ。でもエゴかもしれないけどさ、私にはそんな腐った所にユーノを置いておきたくは無かったんだよ。だからこそユーノに進言したんだよ、本当に今の親で良いのかを。まぁ端的に言えば戸籍を変えさせたんだよ。」
　アルフさんは語った、ユーノ自身親自体に嫌悪感はしっかりと持っていたことを。だからこそその申し出を受けた事を、新しい親は今の司書長である事を。
「もうこの話は方が着いてる、だからさっき言ったんだ。〟話を聞いても何もしないでくれ〟ってさ、彼奴も何時通りの対応されたかったから言わなかったんだろう。」
　そこでアルフが話を終えたと示すように息を吐いて力を抜くと、再びシャマルが話し始めた。
「これでユーノ君の過去についてはおしまいです、後は先程言った時の杭についてで

す。」
「あれがまだ何かあったのですか?」
「あったと言いますかなんと言いますか……とりあえず結論から言いますと〝時の杭は外れました〟、ですので彼が早死する可能性は低くなりました。」
「なんですって?」
　この言葉にアースラ組は驚きを隠せなかった、何故なら――
「ど、どうやってですか?!先程も言った通り杭は心臓に突き刺さって外そうとすれば死は免れないはずだ?!」
「はい、クロノ君の言う通りです。ですが陽天の書が外してくれたのです、なんでも〝魔道士と適合する際に体の悪い所を治す〟事が出来るらしいんですよ。まぁ、ユーノ君自身賭けな所があったらしいですが。」
　その言葉に私達は安心していいのか、それともそこまで追い込まれてるのに気づけなくて悔しがればいいのか分からなかった。
　そんな事を考えれる程心も頭も落ち着いていなかった。そしてその話でこの会合はお開きとなった。

9話

話が終わるとアースラ組は事情聴取の結果の確認に、アルフさんは無限書庫に行っていった。シグナムやヴィータも仕事があるらしく別れた。残った私達はもう何が何か分からなかった、ただユーノ君に会いたいと思いシャマルに病室は何処か聞いた。

その所、適合が思いの外体に負担がかかりまだ緊急回復装置という物の中に入っているらしい。会話は無理でも姿は見えるらしいのでそこを向かった。

そこはガラス張りの部屋で外から中が見えるようになっていた、そしてその部屋の前に二人組みの大人の男女が居た。そして女性がこちらを確認すると直ぐに目線を逸らされた、まるで見たくも無いものを見るかのように――

男性の方もこちらに気づいたらし何やら気まずい顔で挨拶をしてくれた。

「こんにちは。なのはさん、フェイトさん、はやてさん」

「えっと、貴方達は――」

「あっと、しっかりとした挨拶はしたこと無かったね。ごめんごめん、んっんー……僕の名前はゼネラ、ゼネラ・トゥルメ。無限書庫の司書さ、それでこっちが――」

「……スウェン・ニュタカよ、私も同じく無限書庫の司書をやっているわ。貴方達もここ

に来たって事はユーノ君のお見舞い？」
「は、はいそうです……」
　ユーノ君の体はとても深刻らしく、部屋の中には入れずこうしてガラス越しにしか見せないらしい。それもユーノ君自身が機械の箱の中で横たわってるせいで良く見えない。
　それでも気持ちだけはと早く良くなるよう思っていたら不意にスウェンさんが話しかけてきた。
「貴方達、ユーノ君何でこうなったか聞いたの？」
「はい、シャマルさんと――アルフさんからも」
「そう、アルフさんから聞いたってことは〝あの事〟についても聞いたのね」
「はい」
「――多分ね、私達には貴方達を責める権利なんて無いんだと思う。だって彼の事についてよく知っていたのに誰も彼を止めれなかったのもの、それなのに知らなかった貴方達を責められる筈無いわ。だけど、大の大人が子供に向かって言う事じゃないのは重々承知しているけども！　……私は貴方達が羨ましくて、憎かったわ」
「?!」
「その事については――」

「ええ分かってる、誰も〝親友〟が命の危機なのに笑ってる何て思わないもの。だけど、それでも貴方達は私達よりも確かに〝誰よりもユーノ君の傍に居た〟！　〝誰よりもユーノ君を止められるかもしれない人〟だったのよ！　……申し訳ないけど貴方達に感謝を感じるのと同時に憎んでも居るの、暫くは無限書庫へはメールで仕事を頂戴」
「わ、分かりました」
「すいませんが、スウェンさん。憎まれるのは分かります……私自身、気づけなかった自分の事が憎いくらいに。ですが感謝ってどういう」
「そ――」
「それは君達がユーノ君の支えだったからだよ、はやてちゃん」
「ゼネラ」
「スウェン、苛立ってるのは分かるが1回頭を冷やせ。彼女達には何の非も無い」
「……分かってるわよ」
　そう言ってスウェンさんはその場を立ち去った。
「スウェンさん、私達がここに来たから――」
「気に負わないでくれ、どうせ煙吸いに行っただけだろうから。それで何で感謝してるかって話だけど、さっきも言った通り君達がユーノ君の支えだったからだよ」

「私達がユーノ君の、支え……ですか？　一体なんのです」
「それは勿論心のだよ、ユーノ君はいつ死ぬかも分からない極限状態で自らあの書庫で勤務していた。そんな中彼が笑っていられたのは君達のような親友がそばに居てくれたからなんだ？」
「私達が……ユーノを助けてた？」
「そうだよ、彼は何よりも大切な人を思い、何よりも親友との時間を尊いと感じていた。その度合いが並の人よりも強くてね、だから彼は死という最大のストレスを抱えながらも笑えられたんだ」
　どうか彼が起きた時もいつも通りに接してあげて欲しい、それが彼が望んでいるであろう事だから。
　そう言ってゼネラさんも病室前から立ち去った、私達はただ硝子越しのユーノ君を見つめる事しか出来なかった。